





連載小説 其ノ貳拾貳

楠木正成は盛夏の北陸に在る。木曾義仲の挙兵から上洛に至る道程を辿り信濃から越後に出た一行は、日本海沿いの宿場々々から山中に入り福岡、石動を経て植生の郷に入った。到着を待っていた八幡宮の宮司が宿までの道すがら父相から伝へ聞いた昔を語る。

治承四年(一一八〇年)、平家によって幽閉中の後白河天皇に代わり、第二皇子・以仁王が全国の源氏に「平家追討」の令旨を発布。王の旗には平治の乱(一一六〇)以後、栄華を極めた平家の配下にあった摂津源氏の源頼政や、義仲の異母兄で頼政の養子となっていた仲家が参陣。宇治川を挟み、平知盛(清盛四男)・重衡(同五男)らとの激戦の末、頼政は自刃、仲家も以仁王とともに南都へ落ちる途中討ち死にする。敗戦のなか、頼政の郎党のひとり、故郷の植生に落ちのびて来る。が、それを追捕せんとする平家は越中の前司の国司で「一門随一の剛者」と謳われる平盛俊率いる一万余の軍勢を北陸道に派遣。弥太郎は皇子を戦中の豪族・宮崎太郎に託し、獅子奮迅の戦いの末、皇子は宮崎の船で、令旨を受けて越後から進軍して来た木曾義仲を馬籠峠に元服し「北陸軍」を名乗る。盛俊の軍を高く睨んで撃つ義仲は、植生に入り、八幡宮で頼政、仲家、弥太郎らを慰霊することにも戦勝を祈願し、眼前に迫った新波山に舞めく平家の赤旗と対峙する。



2031 楠木正成 拳兵700年 作 池内文蔵 題字 大東守

加賀に入ると「牛攻め」の功労者である富樫家の玄孫に当たる高家が柴沼湯の畔で待っていた。泰家は義仲の死後頼朝に仕えるも、平家滅亡後に北陸道を奥州平泉に向けて落ちる途上の九郎義経(頼朝の異母弟)を見逃したことから、一時監居の憂き目に遭った。その子の代に安宅の地頭職を回復され、いまに至るといふ。

家陣へと追い立てる。山頂に集め、平家軍は猛り狂う牛たちに驚愕し、我先にと逃散。その殆どが峠の絶壁から谷底へと落ちて死んだ。

楽書楽読帳 夢野悠人

土地の高低、土壌や岩石などの自然環境や社会インフラなどを調べ上げています。山岡淳一郎著「勝海舟 歴史を動かす交渉力」(早思社文庫)に「(早思社文庫)に...

海舟、サンフランシスコ(桑港) 見聞

桑港に到着した海舟(毎日ワゴン)から拾物、郵便や病院、印刷所、劇場、金山、ダン...



桜田門(筆者知人撮影) 文芸サロンの会場

文学サロン

大阪府立大学名誉教授 萩原俊治 スピーチ

「大分県」の「ドストエフスキ」の「エレベーター」ではカーニバル論は入っていない。...

話題の本

サーキット・スイッチャー 安野貴博 著 早川書房 1,870円(税込)

「都知事選2024」(7月7日投票)において安野貴博候補(33)は15万票を獲得...

15世紀中頃まで、地球は数度の巨象の背中で支えられた円板状で、海水は水平線の下に流れている...

コロブス 回りの航海で、ロンドンや「インド」に到着したと思...

イスマ教において、義務と責任ある者という意味です。他方、シンガポール出張から羽田空港に降り立った岸田文相に「すげーオプティミズムに...

芭蕉の出立 木井 昭一 文筆家 芭蕉野分して雨に雨を聞く夜かな...

小説 ランドリー SF作家 中森 臨時 洗濯機が壊れるのを修理しようとする...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

悪党の風貌

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

「エレベーター」の病室にもあり、作田氏が生きてい...

